

加横西葛杜加國風說考

全

ル 7  
3089





門 7  
號 3500  
卷

門 7  
號 3089  
卷



加横西葛杜加國風說考

鈴木重壽南  
序樓珍藏之記

昭和十四年  
一月二十六日 購求

カムサスカヤは赤蝦夷乃存名ありはらく其事を  
尋めらば阿蘭陀乃東隣にわらうて國五ラロミヤ  
とりよは國の都をムスカツビヤとりよは國をムスコハ  
と云は國は事なりけ國字を又年中乃比より  
伝ふと云ふらうて正徳の比奥蝦夷カムサスカと云  
ふまて皆切去り之りカムサスカとハ赤蝦夷乃存名  
りて日存ゆて赤蝦夷と名傳ふ也此國ありてハ



カムサスカと云由蝦夷とカムサスカとの同水多嶋とて  
鳴らる中嶋をも享保乃比多々手ゆ令て城郭  
るととる海とてなりて國の人折々漂流して松前  
乃近來ゆゆ他阿蘭陀と國味なる玉りて夫  
東日中道とわ千余里を過りて奥蝦夷と  
ひらぬるうらぬと事と兼て就て荒増を  
考ふぬ松前人乃物語とやらん書物に記さぬ  
能合と事とも友海安浦地とてとるひ  
旦おらぬ可なとて一冊と名し  
考乃禮授をわけと一冊と一合せて  
此冊とありぬと一人上の巻めてぬ  
下の巻に見るに及ぬ事とてなりて





赤杖風説之事

一 招茶のく乃物借とす乃蝦夷の奥七宿、當て回あり  
赤蝦夷と云 蝦夷の東小乃未結海、子海と名附く  
鳴の大小あつるも申崎つきより形、交易の事昔の  
有、由赤蝦夷の産物、鯨鯨の油敷、其亦蝦夷の  
物取、出よりけ方より、塩茶、物取の細子、其  
物、庖丁、と渡して、口蝦夷との交易、有之事、昔の  
傳、赤杖、是を赤蝦夷とも、赤人、其大蝦夷人、と惣  
名、以て、眞蝦夷と云、名、せり、一、統、乃、近、来、標、流、





号して折々蝦夷地ウラヤシベツノツシヤム道一志船  
其の類昔々事習り舟の帆をくふおらんて船乃  
遊りて人物衣服の仕立所蘭院人小敷して羅紗  
天鵝と稱し帆乃敷を乞へ通詞も百連来家  
蝦夷通詞日本通詞有て日本乃言語をつひ  
かたふあこと書通せんと言事なり蝦夷通詞もよ  
蝦夷乃言語をききして能通弁せきせらるるも  
小斤ふめて之十一字の歌をどやきされ振付し  
有ていふ事決こと尋ぬる小通詞乃言状昔

人小國小吹流さして来り付身しつて書状を  
さつ子孫日本言事我能い日本事小通を  
家業と云ヤクツコイと云國小一郭をいふ是我  
極育ち我も先祖日本事なり物語し其國  
乃名を尋じバヲロシヤと云舟中小肉桂沉香胡椒砂  
糖乃敷不有之羅紗程し帆をくふの敷との小  
法器物も有り舟中食器も道具浪器多て  
羨浦きしひや成る乃由内心日本交易乃心  
よと漂流と号して船を寄しと云古来の蝦夷



乃舟物と違ひ新紐事と有之其詳を以て追及す  
由又或時理不々陸地より陣取らるるの指九掛り  
飛道具を用ひて蝦夷人と合戦ありし事負死人あり  
其有て引退く事あり但是等の人物は之初より  
赤色を敷めて赤蝦夷乃此舟物と云ふ事と云ふ事  
人物も何れも極小海地にて蝦夷が又格別  
の場をいふもぬ小近來か有る事極むべきの儀あり  
又國名をフロシヤと云事ハいぬかーフロシヤと云國萬玉  
の有りやと物知り尋ねぬハ人知ると云事

長崎人の松前人の物語は昔々今を以て阿蘭陀  
引當てんるも明白なる事共あり能く考紀し  
ハフロシヤと云ハムスコビヤ乃惣名也赤蝦夷也是依  
トてムスコビヤ乃役人其地來見し所ハ國名を尋  
ハフロシヤと云事とは事なりぬ

一長崎人の物語を聞ゆ明和八年即年國舟漂流と  
て奥州海を北上信の鼻に漂えし一夫ハ阿波の沖  
ありて書管茂長崎より尋ねたり人ハ船りか  
國名を尋ねぬハカムサスカ舟中の主人ハマウリツアタル



ハビゴヤと云ふ其書簡ハ江戸達一 公儀の古馬  
らきおらんご人海渡り初 海尋わつて阿蘭陀通詞  
存の文書を尋る其文通の訳ハハビゴコロトイテ國の人也  
トイテト云  
フニ多種類也 先年モスコビヤと合戦あり比擣る事あり  
合を拾人餘カハスカカ流人とする折を伺ひは度舟  
と登て東海をゆく事(國) 歸らんしてとるは日本と漂流  
を宛て小阿波の太守カハ惠小よりて命全き事と傳り  
其石子忠をとりぬらうラニダ人ぬ造りて中紙を日本へ  
申達し謝礼を述書よりやく報らふより

赤蝦夷此本(國)ハラロシヤと云ふ故おしるは  
ヒヤとも云カハイスカと云ハ赤色を乃本名也カハシカトカ  
と云も同形也毒酒の考(別冊)を入但し事あり  
急時急進かきし今思ふ

一 赤蝦夷乃事(國)をララシタメ事ぬる種々の説を云ふ事  
とかく日本(對)して隠謀有りとかは事(對)して海渡を云ふ  
事(對)して心底のりおらんご通詞の物語り事(對)して天明年  
乃風説書ハクユスと(國)日本(對)して隠謀有り申の事  
を云ふ事(對)して風説承りハクユス(國)事(對)してラロシヤの事



小舟の赤蝦夷カ弁スカの事なり右風説去の一段信用  
去る事なりなり前後の次第を以て考ふる如く  
モスコビヤと近隣する國にて其方其方親補ララシグハ  
クユス國も伏後去る國の所聞也トイテ國として  
同一年にて其後去るにて其事多しララシグハ  
見ると小既ニ事保乃以ムスコビヤ乃人其國主の下命カラ  
ラシグハカヒタン國道也カ弁スカが南日本の地方  
吹拂に似る事と云ふも其れが當時也むらほ一車志也  
より明和八年の漂流ハハビゴロも中敷の事なり

乃地説を云んとて海上切去ぬララシグハ人を海  
ラロニヤの者云と云ふ事と見ゆ也右の如く見ると人の  
語を聞て其後をさげて海の深さを云ふ事由日本なり  
了の海を浅深を云ふ事と云ふ事なり  
かよ兼る中く漂流の所なりと云ふ事  
想て紅毛人カ弁舟の中  
ら市の海の浅深を云ふ  
事なり其の事一也より其心きりて其の中同安の事あり  
はり前後の次第を考ふる中其軍兵を起して大合戦  
なり其事也云と云ふ始に云蝦夷の小舟カ弁スカ



乃比斗の鳴之い其業めてフロシヤ乃國の評  
義小物了き事や其業をてしし私考る日本  
乃金銀銅多き事を知るや何卒交易をてんん  
也むおらん日本と交易をてんん國家治り是事  
をてんんゆへをせしや交易をフロシヤの徳用志を  
此忠有事を阿蘭陀とてんん一其通ふ小なりてハ  
ラニタ國の衰微もあふ事由何卒は後昔日本とフ  
ロシヤと通商するきよめと念欲して種々其後を  
始りしとてんん其子細ハラニタ日本人とてんん

南國が出たありラニタハ極小國めて日本の  
てハ細工物斗の依り海上幾万里とてんんて雜用も多  
くその買出物の直販も次第有事也又フロシヤ乃國  
ハ赤蝦夷と領分中乃地はてんん赤蝦夷より日本  
東海上隔ててい鳴はてんん内海日本  
ありフロシヤの都ハシヤの地大海有て運漕自由也  
ハシヤインテマアラヒマアフリカ等此諸國皆大河を  
通用自由ありハ諸國乃產物ハスコシヤ乃都ハ  
英國の產物何れもあき物ありハスコシヤ乃都ハ



カハサスカと云ふ路と云ふも各大河有て運漕自由あり  
大小海に出し海上自由事上皆領分の内を通りしるも其  
路を日本へ送る事當の内ありしるが如く事又ラロ  
ヤの唐と此通海に三の助ありて交易とし使弊しよむ  
有事ゆへ唐物數ハ多小京に運漕しるが如く此事  
諸色の直段格別下直事する一度交易し海に  
唐紅毛の長崎交易ハ益事ものと生ずると遠事  
あり此れゆへに此路を中絶して我國を欺て未  
昔ラロミヤと云ふ路と云ふ事ハ昔ハ

語を通詞に聞か紅毛の北海を宗日本へ来たる道  
近くて去るが海上に地多くて宗がく才一小難題  
乃の去性雙凶悪なるを宗が通事那ハ是を思  
て北海を宗がく才一小難題と云ハ昂ラロミヤの領分  
なり又日本めて乃心得をいふ道も一通りの海路ハ  
有るもの也昔二通りの場をいふめて無名目業代者も  
有今この蝦夷人も同前ありハお控ても有アハ新  
大國めて一通の御要害を中めていつ道の國よりも  
知らしきふなるが如く此路を宗がく才一小難題と云



をくみラロシヤめては日本人を撫育して語の育進をう  
たうハハニコロカ軍海上を宗回して外國の地勢をも  
見届けあせたる何事をとらうはも爰中知るは歩  
捨置けざるものありぬ事也依て祢かきくハ細吟味  
有之海法考の通り無お遠事あつた一通り通  
路有て軍事也只今の方めてハいつとも表立事ハ  
有はま也又拔荷の次第ハ先かたを内もそや内  
首之の扱、察、い、也此拔荷乃防きか、甚ク六ヶ  
浦事ありぬ道路有之ハ段、い、ぬ、ま、内、の、事、也

注意ハ要害才一也又第六拔荷の禁制也此は  
お捨あ、ハ拔荷ハ段、功者ハ事、何程も出、ぎ、也  
是ホの事を考るハ表立乃交易有之ハ亦ハ那、  
交易あり、其向の人情も志、是風土も志、是也夫、向  
のキ手當も有、ハ又其十分をい、ハ志、ハ金銀  
多き由、世のう、ハ度也昔ハ事を志、ハ者も  
力をそ、ハ由、蝦夷ハ砂令あり、ハ送、ハ  
を、ハ人多、ハ又松前人の物産を聞、ハ松前ハも  
昔より世傳も有てハ依、ハ蝦夷ハ金山ハあり、ハ



由昔ハ其志々の令し多く有之り一今有之知と抄  
金めての中よ有てて悪物也出金入用ははの  
を其外銀山銅山も有之り一其れ入用はは合を  
堀事ありと兼一其れ乃物諸也ハ恒事事ハ一  
さしと兼一其れ乃物諸也ハ恒事事ハ一  
凡一見届し事也實正金銀洞有之ともハは金銀  
洞を堀しして是を以てラロニヤと交易わして交易は  
利潤を以て入るに役ありハ何れ入用也して其れ  
有之事也其れ細ハラロニヤハ兼一其れ乃産物也

數は國の入りたるその金銀洞ハ其物有丈夫の國ハ  
乃洞澤とあり又唐紅毛此交易ハ其國のラロニヤ乃  
交易ハ事と志ハハ心のしみて諸式も格別下直  
相成るの直段と字ハ銅液一乃高し減少有べき也  
又交易ハ直段を以唐紅毛乃直段ハつき合せ見まハ  
唐紅毛乃本直段年ハの相切共ハ明々也其事也  
又是と有る方ハ俵物を好む事國の近きハあり  
紅毛乃俵物を其のまぬハ國のききハ也ラロニヤ大國  
中ハ城下ハ其國ハ其カムサスガハ近玉の上ハ極小邊



あし我が國の債物米酒等の類ハ令も絶て好む祭  
友交易けりまゝ債物整斗めても大方の事候一  
さし共ラロニヤ乃本心家國の金銀河も目を付しと思  
はるカサスカ乃地付の鳴急いもの心得とは格別な事  
とん極て置へき事也やラロニヤとの交易は通商ハ  
取共蝦夷乃金銀河を以唐紅毛の交易と云ふは  
いけの國の温を入用引合ぬとて換置へき物不  
ぬ事也何れも我が國を豊にするは手段も志くは  
ラロニヤの大國ぬを思て通商を志ぬ事候

なけまはしらるる事候也志くはあし  
事也又宗門の吟味も亦やりかてはめりあり候事候  
て乃後此手段奉り持めて年々交代有へき交易  
乃物ハ細吟味も是は急事候し又は候て捨置  
の候荷ハ年々出増へて免かき年々ラロニヤ乃者  
事候事と見やう利を改む人情めて候荷倍増  
をべき候は蝦夷地乃候荷を禁中へかき元ハ相前  
乃不急申て下急も候届くべからば又相前産物買出  
の爲諸國のものを入る候候候賣捌ハ方也又東海



海路を貫へて琉球之交易を段々おぼへて、猶之を  
かゝるに也。紅毛書にて考ふるに、ヨロシヤ乃日本と交易を好む  
數千年以前、乃新向と見ゆらむ。其を以てして交易  
をさへまの心有と云ふも也。此は實に奉許を置く  
支配無くて、禁制志がらば、其を以て日本の富家  
たる事と求む。免か、蝦夷地を以て味をさへ  
さへ取らば、蝦夷地の金銀河を以て我國の入口に、其後  
其の國自らも、或は有之、依之、年々異國渡り、乃  
銅を以て、其に、板荷、禁制の御法令、行届く、而して、

數十年の内、其國の豊小なる、其の事、とさして、其の  
なる、人とか、一物、て、玉を、治る、の、事、に、我國の力を、たつ、と、さ  
む、り、國の力を、厚く、さへ、免か、其の、玉の、宝を、我國、に、  
入、り、が、第一、と、云、へ、り、其國、に、金、銀、銅を、我國、に、事、に、其、玉  
人の、其國、の、專、一、と、さ、ら、ぬ、其、心、を、用、て、出、貨、と、さ、ら、ぬ、  
あり、ぬ、其、玉の、心、掛、り、引、魚、つ、き、ぬ、貴、物、と、さ、ら、ぬ、依、り、  
中、七、及、ら、ぬ、事、也、日本、の、力を、益、す、に、蝦夷地、乃、金山、を、  
以、り、き、并、せ、出、産、物、を、多く、さ、ら、ぬ、事、に、さ、ら、ぬ、一、蝦夷地、乃、  
金山、を、以、り、其、事、者、乃、山、師、去、之、物、に、以、て、處、事、が、入、り、と



出るとおもふに依之るは此のあり然るも亦  
一乃ラロニヤと交易の事起るは力を以て是後あり  
度事やう此是後と交易とのちをかりて蝦夷一  
國を伏後にては令根洞かきくべ一切の産物も  
我國の用を以てし右交易の場亦わぶがち  
蝦夷地の海を以て長嶋を以て惣て要害あり  
港に引文く宜しき也右中偏日本のちを我  
益事蝦夷地と一乃ありが蝦夷もラロニヤの下を  
所從ふたもや我國の支配は海に絶つべし

年

近らぬ事ハ下説めさるぬくの風説を用小之  
乃方ハ隊ヲロニヤもあつきたるは自由業も其  
めて一旦ラロニヤも志すては力も及ぶ是を以て  
てハ差置かざり事とせざる也唯今との通りて  
あるは何事を以てし是もぬ事也前々之の我國  
の力を増國中ハ蝦夷も志すは是も依て是を以て  
しき也何れも國益を考る共我國のうち斗めて  
手段を以てはさかく備は有るべきあり増ては  
後より次第ありハ亦捨置かざる時節とせざる也



板荷禁制乃一件ハ僅々ニ支ふるヲロニヤ乃心筋の  
板荷唯今この仕法にてハ此等ノ制志カケル法合あり  
し道程穿鑿して此度物ハ蝦夷地ノ金山トヲロニヤ  
の振とあり之と此乃出金百あるを以てヲロニヤの千兩の  
と代る事なりバ随分増はく事歎きなりバ計書乃  
評義ハはしりやむありぬ

惣共千兩中千兩の出高めてハ一ヶ年ニ交易のる引  
合ぬ事なる江毛交易小ゆづり合せて取らる事  
らよハ事就付ノ親キカぬ又前ト此の蝦夷地

山の爲に、入月の度ハ他の金山と事整へし  
有蝦夷地乃金銀通用之と只米酒迄もこの  
斗りを好む者入用ト以て金銀ハ貴きと山内  
乃人の強分入用斗りめて是を以て地舟の之を成  
ゆせて働くゆへ強分ハ皆俵物めて正金ハ入ぬ  
也也支取入用多し掛りても 出金高を以て交易  
金の助けと成へきあり

附録

蝦夷地ノ東西ノ差別有車



一 松前城下の東七宮、尚一淺岡、大山、近河、  
 大山、古草、金沢多、由松前家の祖先彼  
 地、作舟、船、國、入、近、金、城、も、一、淺、長、井、の  
 出、左、路、沿、り、十、数、千、丈、と、屏、風、の、如、く、切、立、地、有、り、是、を  
 切、通、と、云、右、山、は、き、城、下、の、九、里、東、西、の、山、と、云、く、一、と  
 堀、の、有、り、は、（こま、り、た、い、は、い、） 右、淺、岡、の、山、つ、き、九、里、程、有、り、其  
 内、に、水、溜、池、有、り、中、に、松、前、家、の、先、祖、六、代、迄、み、り、  
 金、多、く、出、り、九、十、兩、の、金、を、堀、に、依、り、其、所、に、法、家  
 中、の、藏、書、の、為、程、長、砂、金、拾、五、兩、と、云、ひ、計、十、兩、程、の、

残りの由

一 松前城下の東、廿六里程、先、取、銀、と、云、ひ、法、國、の、地、に、  
 入、り、此、の、右、の、所、の、東、の、方、を、山、と、云、ひ、大、山、有、り、と、烟、山、と、  
 硫、石、明、丸、の、數、も、出、り、也、中、に、新、銀、の、所、人、白、鳥、新、十、兩、と、  
 中、者、先、年、の、商、賣、後、年、お、休、  
 一 惠、山、の、千、里、程、先、立、う、つ、つ、と、云、ひ、ク、ニ、又、イ、と、川、有、り、川、  
 濱、道、の、三、里、程、上、み、り、一、金、有、り、右、の、先、年、松、前、家、より  
 み、り、堀、の、有、り、金、の、甚、多、り、其、後、方、に、存、り、多、九、兩、中、  
 お、休、の、右、の、地、宝、曆、年、中、に、戸、所、人、の、城、を、去、り、と、中、者、頭、



岩小人貝付夫澤友龍友宇依久仁丸馬友兩人を伴右  
場に見分た後得共子細有て其功一、右除キ由此  
而して砂金多ク川上ユウハリミヤ大山有之金山あり  
ニツユノユウハリと戸右の所クニタイ并西急をセタイ  
と戸右と両方、引流出る

一クニタイ分東みサレと戸一有け所松前城下分百六十里  
程も有之ハ中一古来、金堀共数人入込由家数十軒  
立り有之

一夫分東みエリモヒと云所古来分金堀流國分入込蝦

夷蜂起の節盜堀のもの乃百人松前分仕置有之、殊殺  
害ハ是を百人漢多ハハハ甚金多由中付ハ  
夫分概々山も平くめて赤蝦夷海口近一ハハアツケニ  
程を一赤急をハハアツケとハハ漢多由

### 西蝦夷地の事

一松前城下分三里程有之赤神と戸一山有之右の所  
西ニキヨベと戸一銅出る

一夫分六十里先ニスツキと戸一古来金堀多ク入込由  
其跡有之



一城下百五十里先石路中二大川は川筋七百裡也  
ユウスリウ近

一丈分西百里程先マシケル中濱はきぬホロル  
みり金もく先年松前家の家来野村某右馬守者  
掛り品銭の得甚名事也九並は金く仕方及  
る事兼りは方印者乃の有之り能き子殿也  
下

右も兼り付記置也金山の民一向は存を  
為連か始戸の交易乃其才一の入用事

其流増なる記主後の考少合とるる事

天明三年正月

カムサスカ フロシヤ 考之事

一赤蝦夷地の國をカシカツともカムスカトカとも云々此  
方乃好事乃事并長崎の人との育分はあり  
処多其根え萬國地の國を山の及澤加横西葛杜加  
と此儀ハ中國の事をちらん文字か

カムサスカ フロシヤ 考之事



及譯して加横西葛杜加と書あり是唐山人のララン  
タの羅甸ラテン乃法法ら方事と云ふも亦カムスカトカノ文  
字をトナリめていふカムスカと云ふ小国あり  
惣して番字の心得ぬ外國人の惣ら語言の出づるゆへ  
怪記がムスコヒヤとララニタと隣國なる格別  
ちかひ唐日なと尚更と云ふ郭公を同めはん人  
かけと書志しるれせつる處んかけと云ふ女婦  
郭公も皆其方人乃心めらといはれども不き  
乃調子いふるびキカムスカも其通りめて松前

人の耳めカムスカと聞ゆはまを説教めて  
カムスカと記がよりあるかちめ紅毛書めカムスカトカ  
と云われて書記めが怪ぬるも一ホルラニテヤと  
日本めてハララニタと云ふ唐らホラウニ和蘭と云ふ如きとれバ  
カムスカと記より一萬國地圖を見らめカムスカ乃  
地赤蝦夷地事明らり志りし赤蝦夷ハカムスカ  
と云國と云ふ一此國ハ北亞里吉利加の境内めて志りし  
モニエルの族あまハカムスカと番名を以國号と云ふ事以也  
徒業古め那昔分代名カムスカわらう御らめ玉を尋ぬまバ



カカサスカと云はれてラロミヤといふ事いふ事記や松  
前人もきくべぬ又何のゆへか日本人を指して多孫多  
る業とせしむるにかゝり又前後の次第并記の難説  
を考合するに一通り置くと度ぬを博學の士も極密  
めて尋ねるべしなれども也

一 國名をラロミヤと云根えを尋ねる阿蘭陀書物のうち  
千七百四十四年 フランタ公傳の一年二年十集て年号なり千七百四十四年、延享二年也千七百八十一(一)八今の天明元年也  
用板乃へシケレイ。ヒニス。ルエスレント 是書籍の名也ルエスレント國の事と書記をサト云事なり  
千々レイとハ記録と云事 千七百九年 明和七年 用板乃。セラ  
ハハ助字ヲエの字ニ當ル

カラアイ 萬國の事を記ス 書と云事あり ルエラ 千ニ字乃の内めて考ふる  
アロミヤ ラロミヤ といふ國え物を松前人の耳ハラロミヤと  
聞へ是又前年の事と云はるる理合を松前人の耳ハ  
但してラロミヤと書記をあり 此通りめてハ分りかた 一名  
ルエツシイニ一名ルエスラント ハ國 の都の名ムシクハ又モ  
スコヒインホモスカウヒヤ 亦ムスカウト云是則ハ方なる  
昔より唱へし一つのムスコヒヤめて惣名をラロミヤと云  
と云はる也 ユウロハ ラロミヤ乃國古代 歐羅巴 ユウロハ 堀内にある國あり  
が故と云ひしうて今ハ東西百七十度余直して大世界乃



一才を保つ西ハ歐羅巴乃嵬中の隣國を蠶食し  
東ハ亞細亞<sup>アヒヤ</sup>鞏<sup>タツ</sup>而<sup>タシ</sup>鞏乃故ウニハリ<sup>タカ</sup>アノ池北海を跨りて  
石炭<sup>アメ</sup>伏從<sup>リ</sup>セ<sup>タカ</sup>りて北亞墨士利加<sup>カ</sup>嵬<sup>カ</sup>カハスカ赤狄乃  
地并赤蝦夷<sup>カ</sup>ノ口蝦夷<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>く及<sup>カ</sup>び<sup>カ</sup>奥<sup>カ</sup>急<sup>カ</sup>カ  
地カラフト乃小サカリ<sup>カ</sup>イン乃鳴<sup>カ</sup>迄一島也一國<sup>カ</sup>あり  
て各代官を至街道を用き河<sup>カ</sup>道<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>通<sup>カ</sup>し海<sup>カ</sup>船<sup>カ</sup>  
と達<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て大<sup>カ</sup>貨<sup>カ</sup>殖<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>銀<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>古<sup>カ</sup>來<sup>カ</sup>カ大<sup>カ</sup>邊<sup>カ</sup>鄙<sup>カ</sup>の地  
赤蝦夷<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>沿<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>熱<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て大<sup>カ</sup>富<sup>カ</sup>饒<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>ふ  
よつて萬國<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>産<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>何<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>取<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>ん

赤蝦夷乃船<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>産<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>有<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>是<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>分<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>ぬ

右ハセラカラ<sup>カ</sup>ラ<sup>カ</sup>ラ<sup>カ</sup>ラ<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>説

按赤蝦夷乃人<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>尋<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>ル<sup>カ</sup>バ<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>サ<sup>カ</sup>ス<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>ト<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>マ  
と<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>ラ<sup>カ</sup>ロ<sup>カ</sup>ミ<sup>カ</sup>ヤ<sup>カ</sup>ト<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>細<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>べ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup> 小<sup>カ</sup>白<sup>カ</sup>衣<sup>カ</sup>  
彼乃製衣<sup>カ</sup>古<sup>カ</sup>代<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>ラ<sup>カ</sup>ロ<sup>カ</sup>ミ<sup>カ</sup>ヤ<sup>カ</sup>必<sup>カ</sup>俗<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>彼<sup>カ</sup>便<sup>カ</sup>利<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>悉<sup>カ</sup>く  
出<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>ホ<sup>カ</sup>ウ<sup>カ</sup>ゴ<sup>カ</sup>ト<sup>カ</sup>イ<sup>カ</sup>ツ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>彼<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>用<sup>カ</sup>  
其<sup>カ</sup>外<sup>カ</sup>製<sup>カ</sup>度<sup>カ</sup>化<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>紅<sup>カ</sup>毛<sup>カ</sup>代<sup>カ</sup>風<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>改<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>内<sup>カ</sup>文<sup>カ</sup>字<sup>カ</sup>ハ  
按<sup>カ</sup>文<sup>カ</sup>字<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>キ<sup>カ</sup>リ<sup>カ</sup>イ<sup>カ</sup>キ<sup>カ</sup>ス<sup>カ</sup>ト<sup>カ</sup>ス<sup>カ</sup>ラ<sup>カ</sup>ホ<sup>カ</sup>ニ<sup>カ</sup>ヤ<sup>カ</sup>ト<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>文<sup>カ</sup>字<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
用<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>其<sup>カ</sup>音<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>本<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>俗<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>依<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>彼<sup>カ</sup>ニ<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>異<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>



なま<sup>ま</sup>り也委<sup>ま</sup>交<sup>ま</sup>事<sup>ま</sup>のあ<sup>ま</sup>のヲロ<sup>ま</sup>ニヤ年代<sup>ま</sup>の記<sup>ま</sup>事<sup>ま</sup>并<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>  
説<sup>ま</sup>を考<sup>ま</sup>合<sup>ま</sup>せて<sup>ま</sup>急<sup>ま</sup>多<sup>ま</sup>一<sup>ま</sup>

一 赤蝦夷の風土記蝦夷の人と相前の人と云々紅毛  
書のセラカラ一にて考あ<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>始<sup>ま</sup>り<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>嶋<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>が  
難<sup>ま</sup>而<sup>ま</sup>難<sup>ま</sup>乃<sup>ま</sup>中<sup>ま</sup>ヒ<sup>ま</sup>コ<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>と云<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>有<sup>ま</sup>數<sup>ま</sup>百<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>前<sup>ま</sup>カ<sup>ま</sup>サ<sup>ま</sup>ス<sup>ま</sup>カ<sup>ま</sup>  
人<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>傳<sup>ま</sup>梅<sup>ま</sup>島<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>  
ヒニユル番<sup>ま</sup>方<sup>ま</sup>抄<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>ハ<sup>ま</sup>モ<sup>ま</sup>ン<sup>ま</sup>グ<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>云<sup>ま</sup>リ<sup>ま</sup>業<sup>ま</sup>古<sup>ま</sup>唐<sup>ま</sup>  
そのあての國<sup>ま</sup>ぬ<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>不<sup>ま</sup>知<sup>ま</sup>れ<sup>ま</sup>從<sup>ま</sup>考<sup>ま</sup>一<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>傳<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>事<sup>ま</sup>毎<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>  
事<sup>ま</sup>之<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>嶋<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>程<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>き<sup>ま</sup>事<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>羅<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>男<sup>ま</sup>女<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>き<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>云<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>の  
事<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>か<sup>ま</sup>し  
と<sup>ま</sup>云<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>

アミルト云川有てモニコルカカサスカ<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>バ<sup>ま</sup>  
アミルト川ハ一名  
カクイニ是ハ

ニヘリヤの急をのわ<sup>ま</sup>大海<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>大<sup>ま</sup>川<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>モ<sup>ま</sup>ニ<sup>ま</sup>コ<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>カ<sup>ま</sup>カ<sup>ま</sup>ツ<sup>ま</sup>カ<sup>ま</sup>ハ<sup>ま</sup>偏<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>  
疑<sup>ま</sup>ふ<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>モ<sup>ま</sup>ニ<sup>ま</sup>コ<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>ハ<sup>ま</sup>ニ<sup>ま</sup>ヘ<sup>ま</sup>リ<sup>ま</sup>ヤ<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>内<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>委<sup>ま</sup>交<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>後<sup>ま</sup>記<sup>ま</sup>ス

紅毛千七百十一年我朝正徳<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>治<sup>ま</sup>カ<sup>ま</sup>サ<sup>ま</sup>ス<sup>ま</sup>カ<sup>ま</sup>初<sup>ま</sup>ラ<sup>ま</sup>ヲ<sup>ま</sup>ロ<sup>ま</sup>ニ<sup>ま</sup>ヤ<sup>ま</sup>  
從<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>千<sup>ま</sup>七<sup>ま</sup>百<sup>ま</sup>三<sup>ま</sup>十<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>享<sup>ま</sup>保<sup>ま</sup>十<sup>ま</sup>五<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>小<sup>ま</sup>又<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>傳<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>相<sup>ま</sup>多<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>入<sup>ま</sup>隨<sup>ま</sup>ふ<sup>ま</sup>  
吏<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>真<sup>ま</sup>物<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>出<sup>ま</sup>ル<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>毎<sup>ま</sup>亦<sup>ま</sup>獸<sup>ま</sup>皮<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>傳<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>云<sup>ま</sup>

一 カムサスカ<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>大<sup>ま</sup>山<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>時<sup>ま</sup>砂<sup>ま</sup>降<sup>ま</sup>事<sup>ま</sup>有<sup>ま</sup>國<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>形<sup>ま</sup>中<sup>ま</sup>之<sup>ま</sup>記<sup>ま</sup>述<sup>ま</sup>して<sup>ま</sup>是<sup>ま</sup>由<sup>ま</sup>  
一 け<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>め<sup>ま</sup>大<sup>ま</sup>山<sup>ま</sup>有<sup>ま</sup>は<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>記<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>あり<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>是<sup>ま</sup>記<sup>ま</sup>ハ<sup>ま</sup>右<sup>ま</sup>左<sup>ま</sup>管<sup>ま</sup>海<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>

より古代日本、交易の物、干菓<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>數<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>鯨<sup>ま</sup>乃<sup>ま</sup>油<sup>ま</sup>也<sup>ま</sup>入<sup>ま</sup>日本<sup>ま</sup>  
分<sup>ま</sup>砂<sup>ま</sup>降<sup>ま</sup>事<sup>ま</sup>鉄<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>細<sup>ま</sup>工<sup>ま</sup>物<sup>ま</sup>又<sup>ま</sup>物<sup>ま</sup>類<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>是<sup>ま</sup>亦<sup>ま</sup>乃<sup>ま</sup>物<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>き<sup>ま</sup>ス

右ハセラカラ一の説  
ハ説<sup>ま</sup>わ<sup>ま</sup>前<sup>ま</sup>人<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>物<sup>ま</sup>傳<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>云<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>  
実<sup>ま</sup>説<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>云<sup>ま</sup>ら<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>



一人物をくま方顔の色薄赤く黒髪の方髪は黒く  
 顔の幅廣く鼻尖り眼くま眉廣く後太く鼻は  
 方手足瘦く肩袖よく膚きかた食はるるを以  
 ちて洗事形一家小家も居て四米を食ふ一考  
 赤くををくま方顔て居る四米を食ふてよめ二階を以て  
 ちめてゆる二階のよめ四角を宛てよめと煙を出し  
 戸あごを漢獵とす一とん皮をたきぬぐの獣物を  
 是を顔をぬぐよめて居る方をゆいせぬす  
 子に根の環を耳に掛り日本めてハラックエツロエツとす

右セヲカラ書物の名ニ乃説

是ハ東之の古来の人物の  
記事ヲヲロニマの人物ハ

一 右蝦夷のよくカラフトのよめサカリイニと云大嶋有日本  
 乃九州の地程有け地もヲロニマの二頃也と云蝦夷乃  
 國めて見よハ蝦夷乃正北乃海上瀬戸程多々通路  
 難ぬとかはけ難ぬの沖ら一二百里を魚らると云  
 左蝦夷地松前人乃志みり今の唐山とヲロニマ  
 の堺もサカツイニと云大河を以て海の如くけはる有  
 崎有なと云  
右セヲカラの説ハ説ハ見連ハタツタニの地の内海へ  
 近き川を以てカ弁スカハ通され程多々一但國説ハ  
 入海を以てハカ弁ツカの西邊は近く便利ぬ一但又サカリイニも  
 カ弁スカト一ツ國と見えては記を以て考







アカサメナハマヤウの音とよめ聲を以て稱するありし所を  
 シワは後へシケルヒハシルエスラントの説セヲカヒと異同あり  
 紅毛千五百十四年永正八年帝號を稱して夫を以て  
 強國とあり中興乃英皇をへテルアレキニウイツと云け人  
 大業をたせし人あり其代前々帝釋號の國を以て  
 けくめりし格別の勳功ありめりし改めたる号となす  
 字義ハ本國の父ヲロミヤ國也大帝と云めてハアテル  
 テスハアテルテンドケイセルハニアルレルエスラントへテル  
 テロコートトケる号ををりて大業會有け時正口ウロハ  
 乃諸國を進貢する紅毛乃種族皆降伏進貢して

隣國のよしみをあらきあらき紅毛種族ハ列  
 布玉ホウコトイワ乃屬國なりハヲロミヤ乃制ト云  
 ありぬ  
享保七年の事ありホウコトイワハ初メあり  
 ハニコロコローカ生國トイテ玉云一國ありトイテ  
 國一ヲロミヤと争國の事書の上あかしてあり是も帝号  
 のをめて世々ヲロミヤの隣國也中むりしきさるる見へり  
 ヲラニタ人乃ありしヲロミヤ乃國氏ハヘーテルヲ以佛  
 わやむ  
 神の如く敬慕せらるる常め稱してヘーテル  
 コトトと云るなり

年代之事

ヘーテルコロート乃父ハアヒキニウスニナイレウツと云ふ



ヘーテルハ其小子也とぞ千六百七十五年寛文十年  
ニサイシウワ山崩を其長子フートルを嗣千六百八十  
三年天和元年崩す左位八年子あり故其弟イハ  
ニ嗣て立ヘーテルの伯父<sup>セトニエ</sup>とて進まともえより顛廢あり  
其上眼を疾て明を失ふとて其女同年ヘーテル也  
其時三年十四歳千七百廿五年享保九年崩す  
年ぬ十二左位四十三年け人英明の主也之<sup>シ</sup>流<sup>シ</sup>家  
大業をせしむる後其妻<sup>シ</sup>リウシヤ乃<sup>シ</sup>國<sup>シ</sup>近<sup>シ</sup>隣<sup>シ</sup>乃  
強國<sup>シ</sup>めて古<sup>シ</sup>来<sup>シ</sup>のムスコウヒヤと名を立也依てヘーテル

乃時代也都を其國<sup>シ</sup>辨<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>て其<sup>シ</sup>強<sup>シ</sup>御<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>  
き<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>後<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>ニ<sup>シ</sup>ユウ<sup>シ</sup>ジ<sup>シ</sup>ヤ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>和<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>乞<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>貢<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>乞<sup>シ</sup>封<sup>シ</sup>  
母<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>かく<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>カ<sup>シ</sup>ス<sup>シ</sup>ヒ<sup>シ</sup>ゼ<sup>シ</sup>イ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>海<sup>シ</sup>道<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>通<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>帝<sup>シ</sup>  
都<sup>シ</sup>ヘ<sup>シ</sup>テ<sup>シ</sup>ル<sup>シ</sup>ベル<sup>シ</sup>テ<sup>シ</sup>の後<sup>シ</sup>ラ<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>カ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>云<sup>シ</sup>高<sup>シ</sup>海<sup>シ</sup>遊<sup>シ</sup>み<sup>シ</sup>通<sup>シ</sup>  
夫<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>東<sup>シ</sup>海<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>な<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>天下<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>利<sup>シ</sup>を得<sup>シ</sup>く  
通<sup>シ</sup>商<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>道<sup>シ</sup>盛<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>

海乃名をラスト。セイ。ル。エ。ス。ラ。ン。と。の。都。乃。ム。ス。コ。ウ  
ヒ。マ。の。西。の。方。に。海。也。キ。記。事。阿。蘭。陀。乃。能。也。東。海  
と記す



ヘーテルベルケ遺詔 キニミヤリ 運斗甚多一後代皆是を以て  
規則とする ハミ 後紀綱大小振ふ嗣子幼弱故也遺  
詔 ハミ 中して皇后位小崩は時ヘーテル德澤益ニ年道ハ  
民之ヲ孝妣ヲ喪まらう如くは女帝ヘーテル母おとめ  
英明故道ハ別号令を出して曰民の父ハ登天しめハ  
き道とも民の母はををいふ海一む事ありし  
と云詔を聞て奉天収伏まると云ふ名はカタリナヤ  
云近國甚弱して貢物次第を紅毛もは時使節  
と海を帝をケイセル后をケイヒと云千七百廿七年

享保十二年崩ス 年四十七 在位二十七年 十七条の遺詔  
有幼 ヘーテル。テウエユノ名を 是二代目の氏 嗣十七百二十年 享保十四年  
瘧を病て崩る 十六先帝ヘーテルコロトは姫アニナ。イハ  
ニウナ嗣て女帝とあり父乃名ハイハニアレシ。ウイツ  
いへヘーテルゴロト乃利彼の兄一度位をつきし 眼病  
乃人の子也千六百九十二年 元禄八年 小生して千七百  
甲年 元文五年崩ス 在位廿五年 年四十六 人始りハ  
先叙を守りて宣しうり小晩年みづから事あるを  
て物辨乃法令く流連を為しかぬ事ありし 崩後子



イハニテリイ嗣初生年月あしめ幼子とて

は人誰多様しむ  
先述よりア二十乃

と年也 けいし けいし海ぶら洋よりみれき内其羽年千七百

四十年 寛保元年十二月廿日夜都下大ら騒動する事

有るをよつて 譏してエリサベツト嗣エリサベツトヘーテルゴロー

トの女也 ヘニケニ  
オミツク の書めはけりをあり跡ハセラガラアヒとる

千七百六十二年 宝曆十二年 延享二年七月九日生れ

未詳 千七百八十一年 天明元年 年と拾 昂當今乃

女主也 英明賢良乃主なり 姓アレキニユサ

フロシヤ開業之事

一千五百十四年 永正十一年 帝号を稱す 千五百零七年

天文十九年 トホルスカヤを領す 是ハ東の方アミヤ  
のまはれあり 千五百十二年

天文廿一年 カサニを伏従す 千五百零四年 天文廿二年 ア

ストラカニを伏従す カサハハ高  
海の小也 アストラカニハ高  
海の小也 千五百十四年

寛永十七年 イルクワコイを伏従す 是ハアミヤ  
乃塚内あり 千五百

八十九年 貞享二年 子トルトスキンスコイの内 子ルトニキト

りし城を築き 唐土の塚を造り 城とハ長城の義也

長城 國を占めて けりる 唐土乃小京とフロシヤの名城

と使幣とす也 子ルトスキンスコイハツシの後  
乃國の所ありて 松のタツタニ故國也 千七百零年



元禄十六年 イニケルラントを従へて城を築く 是ハラロミヤの西ニ當リ

歐羅巴の堺 の内を以て 千七百二年 寛永元年 ぬけつて 皇城を建け所

ハ前条ぬけつてのユウシヤ乃國堺あり 千帝崩 一テ

ちり城下の名をヘーテルスヒユルソ ヒユルソと云ふ事スハ助字あり 千後ヘーテルの年をヘー

テルヒユルソ ヒユルソと云ふ事スハ助字あり 千七百十二年 正徳四年 カムサスカを伏従し

是則赤 エガあり 千七百二年 享保六年 ぬしイソラントを伏従ス

是ハ王城の近隣 千七百廿一年 享保七年 尊号茂を為 歐羅巴乃堺の内也

千七百廿四年 享保十年 センスコイホニ城を築きて 廟

とと堺を國ノ交易して 大ぬ常利を得んと云ふと王國を

あつて 廟と交易を同年 カビタニ 集カムサスカが 邊乃

鳴ぬあり 是を 頌也 是ハ赤を口を以ての同手鳴の内鳴ぬ

通初カ同ぬ小エグの多傳の内を以て 伏従して 始つてぬを揮

鳴人名を請ぬりて サニクトラロウレンスと号 千七百三十年

享保十五年 女帝 アニナ乃 付カムサスカ及して 不ふく 従ふ

是ハ以後 女帝乃 令めて 廟を 日本へ 通ぬりて 二國の強

弱 虚実を 見交易を 成し 度由 評義有し 事と 見へ

あり 又 女帝 アニナ乃 令めて 時の 官人 へルヘルヒクヒと 以

者 へルヘルヒクヒと云ふ事 忽 爾 蘭 德 乃 セイカヒタニ 又 ハレニベル ホルラニト















乃人みふ耳よりをかゝるとんく前のみかみの説お高  
ら以中國眉毛をたふつらあつて蝦夷人の面影をるも  
右乃も鼻ふきを指股引ハ紅毛乃通るもああり  
一カハサスガ乃人名ハキニコニテ赤人とカハサスカと分て  
松前の人カハサスカ同事を知りてあ分て志願しんか  
髪ハ白苧のさけくかぞ一上は荒色の尻沙下も同じ  
黒尻沙股引ハ青色の本綿 股引締りララニダの如く  
縞のさけく。漆射のさけく。多とあつたのさけく。あを  
かじ見髪と指被髪あり

一ムシクハ乃人名ハリエントシ是ハムシクハ乃人の内極下

見へし 上着ハ花色の本綿也下着ハ青色の本綿 股引ハ  
やよもの取めん也 髪ハ白苧のさけくかぞ一冠うあ  
ハ荒色 股引の締りララニダ人の如くムシクワラロニヤ  
乃城下部ムシクハヒヤあり以上人形乃圖五枚あり繪心  
あき人の書よりあけあき圖をれハ皆徴とぬ  
か一依くあきもあき

一赤人國名ヲロニヤト云ハ記前クヲラニヤ乃書の説と暗く  
全正説ある事あつ







④	エ	ハ	ル	マ
④	ヒ	シ	カ	マ
④	ヒ	キ	カ	ケ
④	ヒ	エ	カ	ノ
④	ス	カ	ノ	コ
④	シ	カ	ノ	エ
④	シ	カ	ノ	テ

はま

いれ  
キイラ

按てらみは字讀かゝり  
字ぬり一京と書小

是ハ我邦乃イロハを好て書せるぬべーラロニ  
ヤ乃文字前みいふ如く横文字ぬてなるを  
とて書事ヲラニタ文字の通り

一  
いれ

キイラの三字をクサリテ京の音を

多ういりもの三字をよせて  
ふらうて横文字ぬてヲラニタ乃通り  
とて書事なるを

とたたり右に書







